

# 教育研究業績書

2020年10月27日

所属：看護学科

資格：助教（臨床）

氏名：南 裕美

研究分野	研究内容のキーワード
成人看護学	がん看護
学位	最終学歴
修士（看護学）	大阪大学医学系研究科博士前記課程 修了

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>1 教育方法の実践例</b>		
1. 初期演習	2017年9月	1年生の初期演習において、自身の経験談として、がん専門病院での勤務経験を話した。がんの診断直後から看取りまでにわたって担当した患者の事例と看護について、患者を支えるための看護には疾患と治療に関する知識と確実な看護技術が必要不可欠であること、患者らしさを知り、どのような状況下でもその人らしさを支えることの大切さについて伝えた。その経験を踏まえ、日々の業務の大変さの中にも感じられる慢性疾患看護、およびがん看護のやりがいについて、学生がイメージできるように工夫した。
2. 成人看護学実習(慢性期)	2017年9月～現在	実習施設はいずれも急性期病院である。慢性疾患患者においても、入院期間は短期化しており、平均在任日数は12日前後の施設が大半である。そのため、入院時から退院後を見据えた看護展開をすること、他職種や他施設との連携、社会資源の活用などが不可欠である。実習指導においては、学生が受け持ちを始めた時点から患者の退院時期を意識して、情報収集、アセスメント、看護実践をタイムリーに展開できるように、サポートを心掛けている。また、既往症なども含めた複雑な病態を持つ患者も多く、学生とともに患者の病態関連図を作成しながらその関連の理解を促せるよう努めたり、療養生活を支援するために患者の病気への向き合い方、社会的背景等の理解を深める支援として、患者とのコミュニケーションの具体的な方法等についても学生とともに考えたりするなど、日々の学生の看護実践がより患者の個性に沿ったものとなるような支援を心掛けている。
3. 成人看護学Ⅱ	2017年4月～現在	成人看護学Ⅱの演習では、実習で担当する対象者にとって必要となる療養法について学び、それらが対象者の生活にどのような影響を及ぼすのかについて、学生が患者の立場に立って考えられるようになることを目指している。演習内容が実習や実践のどのような場面で活用できるのか、個々の学生への指導の中で可能な限り伝え、実践に結び付けられるように工夫している。
<b>2 作成した教科書、教材</b>		
1. 成人看護学実習(慢性期)のオリエンテーション資料	2017年4月～現在	成人看護学実習では5施設11病棟を使用する。1期生の実習開始に当たり、実習施設での日々の流れ、実習施設ごとに異なる諸注意事項等について具体的に学生がイメージしやすいよう工夫した資料を作成した。また、この内容と連動させ、実習実施施設の臨地実習担当者および管理者が学生の動きを把握しやすいよう実習スケジュールとのスケジュール表と日々のタイムスケジュールを詳細に示した資料を作成し、臨地実習指導者、管理者、学生、教員が共通認識のもと実習を進められるように配慮した。これらのオリエンテーション資料は、実習施設および学生の状況に応じて随時アップデートしている。
2. 成人看護学実習(慢性期)の記録用紙作成の補助	2016年9月～	慢性看護学実習(慢性期)の実習記録用紙は、長期にわたる療養生活、多様な既往歴を踏まえた看護展開の必要性について学生の理解を深めるための構成が必要不可欠である。初学者である学生が看護過程を効果的に展開できるよう、実習記録用紙の構成や文言などについて、准教授主導のもとに検討を重ね、作成の補助を行った。
<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
1. FD委員会	2017年4月～現在	看護学科教員のFD研修担当委員として、学科教員のニーズに応じた研修実施のための準備、運営に携わっている。学部助教を対象とした研修においては、年間2回の研修を企画した。実習施設との調整、学生への直接的な指導等に関して、困難と対処に関する助教間での情報共有や相互支援の場として研修を運営し、より効果的な実習指導の一助となるよう取り組んでいる。
2. 兵庫県看護協会主催 再就職支援研修会	2016年9月2017年2月	兵庫県看護協会主催の再就職支援研修会において、再就業を検討している未就職者を対象とした講義、演習を担当した。自身は、呼吸器のアセスメントの講義と、シミュレーターを用いた身体アセスメントの演習を担当した。その中で、臨床での実践で日々用いている指標や看護技術について、その意味や根拠を振り返ることに重点を

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
3. 成人看護学Ⅱおよび成人看護学実習(慢性期)	2013年5月～2014年11月	置いた。それにより、対象者の方々が少しでも安心して再び患者の前に立ち、確信をもってアセスメントができることを目指して取り組んだ。 他大学において成人看護学Ⅱ(慢性期)の「化学療法と放射線療法を受ける患者の看護」に関する講義、および成人看護学実習(慢性期)にて臨地実習指導を行った。
<b>4 その他</b>		
1. 看護師国家試験対策担当	2016年10月～現在	看護学部生が国家試験対策に取り組み、全員が合格できるよう学習支援を行っている。主な内容は、対策講座の受講調整、模擬試験受験の受験指導、個々の学生が学習を効果的に行うための勉強場所の調整、個別面談および指導等であり、個別の学生の学習進捗状況に合わせた支援、指導ができるよう工夫している。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>1 資格、免許</b>		
1. 保健師免許	2000年4月1日	
2. 看護師免許	2000年4月1日	
<b>2 特許等</b>		
<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
1. 梅花女子大学看護学部非常勤助教	2013年5月2014年11月	成人看護学領域
<b>4 その他</b>		

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>1 著書</b>				
1. 多職種チームのための周術期マニュアル	共	2004年6月	メジカルフレンド社 191頁	①肝胆膵領域の手術の中でも更新集な術式である膵頭十二指腸切除術は、複数の消化器の再建を必要とし、さらに血行再建を伴う場合には術中出血量の増加から術後管理が複雑となることがある。また、膵臓という内・外分泌臓器を切除することに加え、閉塞性膵炎の影響から術前より糖尿病を合併していることも多く、代謝に関して術前後を通して一貫した管理が必要である。著者らのチームの術後栄養管理は、術中に挿入した経管栄養チューブを利用した“早期腸管機能の回復”が特徴である。そのために行われている術後早期からの経腸栄養管理の方法について輸液管理の方法も含めて説明している。本人担当部分：「膵頭十二指腸切除術の術後管理(輸液・栄養管理) (p.151-153)」(共同執筆につき詳細の担当箇所は抽出不可能) 監修：近藤晴彦編集：上坂克彦共著者名：岩崎すず子、武田(南)裕美、大村ひとみ ②膵頭十二指腸切除術は、侵襲も比較的強く、患者自身が術後に留意すべき点を十分に理解し医療者とともに回復に向けた取り組みを行うことが重要である。そのためのケアとして、術前のオリエンテーションの実際(パンフレットおよび患者用クリニカルパスを用いて行われる周術期のスケジュールの確認、内服薬の確認、呼吸訓練と禁煙確認、うがいの仕方の練習、排便コントロールの方法、連日の体重測定など)について、その方法を記載している。本人担当部分：共同執筆につき抽出不可能監修：近藤晴彦編集：上坂克彦共著者名：岩崎すず子、武田(南)裕美、大村ひとみ ③膵頭十二指腸切除術は、他の肝胆膵領域の手術に比べ、クリニカルパスにおけるバリエーションはやや多い傾向にあり、その2大要因は胃内容排泄遅延と膵液漏である。この章では、術前からの準備、術後バリエーションの要因の予防や早期発見、および術後の順調な回復のために必要不可欠な、薬物療法、検査、処置、栄養管理、そして患者指導について、日常の治療・ケアに活用できるよう実際に臨床で行われている方法を具体的に紹介している。本人担当部分：「膵頭十二指腸切除術のクリニカルパス (p.30-32)」(共同執筆につき詳細の担当箇所は抽出不可能) 監修：近藤晴彦編集：上坂克彦共著者名：金本秀行、武田(南)裕美、大村ひとみ
<b>2 学位論文</b>				
1. ・終末期がん患者へのケアに家族が参加する機会を提供する看護介	単	2011年3月	大阪大学大学院医学系研究科(修士論文)	本研究は、終末期がん患者へのケアに家族が参加する機会を提供するという看護援助の効果を明らかに

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2 学位論文</b>				
入の効果の検討ーアロママッサージを用いてー				することを目的とした。ケアにはアロママッサージを用い、ホスピス入院中の終末期がん患者の家族5名を対象に、ケアを研究者とともに実施する機会を提供し、その後家族単独での実施の支援と面接を組み合わせた看護援助を実施した。本看護援助に対する家族の反応について、参加観察法と面接で得たデータを質的帰納的に分析した。本看護援助の結果、家族には「家族が患者の安楽や充実感を確信する」、「家族が患者への貢献を実感し自信を得る」、「患者と家族の触れ合いの質が向上する」、「家族が香りにより癒しを得る」、「患者と家族が病前の関係性を取り戻す」、「患者と家族の関係性が改善する」、「家族が患者の衰弱を実感する」、「家族が患者との触れ合いに不安と限界を感じる」という反応が生じた。これらの反応から、ケアとして用いたアロママッサージの特性を反映した本看護援助の効果として、患者に安楽をもたらす手段の提供によって家族に患者への貢献を実感させ力を与える効果、家族と患者に上質な触れ合いと共有体験をもたらす患者と家族の関係性を好転させる効果、および家族に患者の状態の理解を促し避けがたい患者の死と別れへの構えの形成を促進する効果が明らかになった。
<b>3 学術論文</b>				
1. Lower urinary tract symptoms in patients with prostate cancer under and after intensity-modulated radiation therapy.	共	2018年	Lower Urinary Tract Symptoms. 2018;1-8.	Yuka Hayama, Hiroshi Doi, Tae Hasegawa, <u>Yumi Minami</u> , Noriko Ichimura, Mariko Koike, Hiroya Shiomi, Ryoong-Jin Oh, Fumiko Oishi.
2. 終末期がん患者へのケアに家族が参加する機会を提供する看護援助の効果の検討 (査読付)	共	2014年9月	千葉看護学会誌、20巻1号、pp39-46	本研究は、終末期がん患者へのケアに家族が参加する機会を提供するという看護援助の効果を明らかにすることを目的とした。ケアにはアロママッサージを用い、ホスピス入院中の終末期がん患者の家族5名を対象に、ケアを研究者とともに実施する機会を提供し、その後家族単独での実施の支援と、面接を組み合わせた看護援助を実施した。本看護援助に対する家族の反応について、参加観察法と面接で得たデータを質的帰納的に分析した。本看護援助の結果、家族には「家族が患者の安楽や充実感を確信する」、「家族が患者への貢献を実感し自信を得る」、「患者と家族の触れ合いの楽しさや愛情を感じる」、「家族が香りにより癒しを得る」、「患者と家族が病前の触れ合う関係を取り戻す」、「患者と家族の関係性が改善する」、「家族が患者の衰弱を実感する」、「家族が患者との触れ合いに不安と限界を感じる」という反応が生じた。これらの反応から、ケアとして用いたアロママッサージの特性を反映した本看護援助の効果として、患者に安楽をもたらす手段の提供によって家族に患者への貢献を実感させ力を与える効果、家族と患者に触れ合いと共有体験をもたらす患者と家族の関係性を好転させる効果、および家族に患者の状態の理解を促し避けがたい患者の死と別れへの準備を促進する効果が明らかになった。本人担当部分：共同執筆につき抽出不可能共著者：南裕美、葉山有香、大石ふみ子
<b>その他</b>				
<b>1. 学会ゲストスピーカー</b>				
<b>2. 学会発表</b>				
1. 青年期女性の減塩に関する調査ー食事の塩分摂取経口調査と尿中食塩排泄量による検討	共	2017年8月	第48回日本看護学会慢性期看護学術集会	川端 京子、南裕美、工藤 貴子、布谷 麻耶
2. 強度変調放射線治療を受ける前立腺がん患者の治療計画時および治療中期の膀胱内容量の実態	共	2017年12月	第37回日本看護科学学会学術集会	葉山 有香、小池 万里子、南裕美、木村 静、大石ふみ子
3. CDDPまたはCBDCA併用化学療法を受けた肺がん患者の遅発性悪心・嘔吐の実態調査	共	2017年10月	第55回日本癌治療学会学術集会	樽井 亜紀子、川端 京子、布谷 麻耶、南裕美、工藤 貴子、鈴木 倫弘、光岡 茂樹、渡邊 徹也、川口 知哉、平田 一人
4. 前立腺がんで放射線治療を受ける患者の治療時の陰部露出の有無による不快感、羞恥心の差異	共	2013年2月	第27回日本がん看護学会学術集会	二宮由紀恵、葉山有香、長谷川多恵、南裕美、市村 紀子、大石ふみ子
5. 乳がん患者外来ケアについての看護師の考えと、乳腺外来におけるケア提供の現状	共	2013年2月	第27回日本がん看護学会学術集会	大石ふみ子、南裕美、葉山有香、中森美季
6. アロママッサージを用いた終末期がん患者へのケアに家族が参加する体験の分析	共	2012年2月	第26回日本がん看護学会学術集会	南裕美、大石ふみ子、葉山有香
7. がん診療を行う外来における看護	共	2012年2月	第26回日本がん看護学	葉山有香、南裕美、中森美季、安田千香、中万里子

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
師の人員配置と看護提供システムの現状			会学術集会	、大石ふみ子
8. 強度変調放射線治療（IMRT）を受ける前立腺がん患者の排尿障害症状の詳細と生活状況	共	2012年11月	日本放射線腫瘍学会第24回学術大会	市村紀子、南裕美、葉山有香、大石ふみ子、長谷川多恵、正井範尚、塩見浩也、呉隆進、井上俊彦
<b>3. 総説</b>				
<b>4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績</b>				
<b>5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等</b>				
<b>6. 研究費の取得状況</b>				
1. 外来化学療法を受ける高齢進行肺癌患者に対する栄養障害評価プログラムの開発	単	2017年4月	科学研究費補助金（若手研究B）	本研究の目的は、外来化学療法を受ける高齢進行肺癌患者の治療前後にわたる栄養状態の変化と関連要因、および栄養に関連する生活行動について調査し、治療前評価としての栄養障害スクリーニングプログラム開発に向けた基礎データを得ることである。現在、対象者に対するデータ収集を進めている。
2. 化学療法を受ける乳がん患者の味覚障害に対する客観的評価を用いた看護援助の検討	共	2017年4月	科学研究費補助金（基盤研究C）：分担	代表：大石ふみ子の分担研究者として参加 本研究は、化学療法を受けている乳がん患者の味覚について主観的および客観的指標を用いて継続的に調査を行い、治療開始前から治療終了後までの味覚障害の状況と味覚障害によるQOLへの影響を明らかにし、味覚障害への効果的対処を促す看護援助を検討することを目的とする。
3. 強度変調放射線治療を受ける前立腺がん患者の膀胱内蓄尿を再現する看護援助の検討	共	2015年4月	科学研究費補助金（基盤研究C）：分担	研究代表者：葉山有香の研究分担者として参加 本研究の目的は、IMRTを受ける前立腺がん患者に対し、IMRT治療時の膀胱内容量とセルフケア行動についてプロスペクティブに調査し、これをもとに、治療計画時の膀胱内容量を再現し、精度の高いIMRTを実現するための看護援助を検討することである。治療計画時の膀胱内容量と治療実施中の時期における膀胱内容量の差が30ml以上みられる患者では、その半数以上に排尿障害症状がみられ、治療計画時の膀胱内容量と治療実施中の時期における膀胱内容量の差が30ml以下の患者では、排尿障害症状の出現した者としなかった者がほぼ同数、治療中のセルフケア行動には、個人差が大きいことが明らかとなり、全体を比較することが困難であった。今後、治療計画時の膀胱内容量を毎回のIMRT治療時に再現するための看護援助について検討していく予定である。

学会及び社会における活動等

年月日	事項
1. 2010年～現在	日本看護研究学会会員
2. 2009年～現在	日本がん看護学会会員
3. 2009年～現在	日本緩和医療学会会員
4. 2009年～現在	日本看護科学学会会員